

保健・体育教育（体育）

「運動文化を問い直す」

中島義夫

一 はじめに

最近ますます増えてきた低学力問題。各地で特別支援教育が盛んになってきてはいるが、未だに「特別支援」に対する偏見が残っている、それ故に、小学校時代から親が普通学級にこだわり、特別支援を受けないまま高校（定員割れで全入に近い）、さらには大学へと進んでくることもある。その子達にとって、それが今後の進路において、どう影響していくかを、できるだけ早い時期に親や教師は判断し、導いていくことが大切である。大学においては、教員養成課程の体育科教育で、小学校体育を取り上げ実践している。その中で、ただ「できた・できない」ということから「どうしてなのか？ どうすればいいか？」という「わかる」というレベルまでになってきている。体育科でどんな力をつけさせることが大事なのかを考えている。今後、

新指導要領の検証をしながらどう「真の体育学力」をつけていけばいいかを深めていくことが望まれる。

（共同研究者 札幌学院大学 大瀬 隆）

二 実践レポートに学ぶ

より高く より美しく

～台上ハンドスプリングへの道～

中標津町立養老牛小学校 米谷 豊彦

1 体育大好き

「今日から体育は跳び箱やるよ。」と言うとほとんどの子が「やったあ」と歓声をあげる。養老牛小の体育学習はこれまで指導者の共通理解が図られ全校的に系統的な学習を進めてきたこともあり、器械運動に限らず、運動好きな子どもが多く運動の能力も高いと感じている。子供達に「体育の勉強では何が好き？」というアンケートをとると下記のようにいろいろな分野の学習をあげてくれる。前期に取り組んだ「マット運動」では、ハンドスプリングやロンダート、男子についてはバック転を含む連続技に取り組んできた。マット運動発表会は保護者にも見に来てもらって大

2 「跳び箱運動」 つてなに？

個人の努力で「開脚跳び」ができるようになったとか、7段跳べるようになった、8段跳べるようになったなど「開脚跳び」の高さばかりを競う傾向は未だに見られるのではない。跳び箱運動は「克服スポーツ」ではない。跳び箱運動は、跳馬（支持跳躍運動）を教材化したもので、身体表現を楽しみ、競い合う運動である。跳び箱による表現は「助走から着地までの一連の運動をトータルにコントロールする力」によって決定される。特に着手してからの第2次空間局面における表現が重要であると考ええる。

第2次空間局面の表現を拡大していくために、回転系の技を重視して取り上げ、反転系の技（開脚跳び等）はバリエーションとして位置づける。また回転系の中でも「台上ヘッドスプリング」は助走から着手までの恐怖心が少なく、また第2次空間局面の表現（制御能力）の拡大に学習の焦点を絞りやすい。さらに技術のポイントが「わかる」ことで「できる」ようになるという長所がある。つまり空間表現の面白さを味わわせる高学年の教材として適していると考ええる。

高学年では「台上ヘッドスプリング」を主教材として、「ひねり横跳びこし」などにも取り組みながら「台上ハン

ドスプリング」に進めていきたいと考えた。

◎技の系統

台上前転 → ネットクスプリング跳び → ヘッドスプリング跳び
び → ハンドスプリング跳び

反転系横跳びこし → 回転系横跳びこし → ひねり横跳びこし
↓ ハンドスプリング跳び

◎学習のねらい

〈できる〉

○助走から踏み切り、着地までを一連の動作として「台上ヘッドスプリング」や「台上ハンドスプリング」ができる。

〈わかる〉

○腕支持からの「ため姿勢」の取り方やね動作と腕押し
のタイミングを身につけると第2次空間を大きく表現でき
ることがわかる。

〈学び合う〉

○腰の高さやはねるタイミング、大きくはねる方法などを
発見し、教え合うことができる。

(3) 指導計画 (12時間)

時間	ねらい	学習内容
第1時	オリエンテーション ○グループ作り、役割分担	○異質協同のグループ作り ○学習のめあてや進め方、用具の準備や片付けなどの役割分担等を確認する。
第2時	○いろいろな跳び方	○いろいろな跳び方を楽しむ ①大きな台上前転をするためには、踏切直後に膝を伸ばして前転できればよいことがわかり、できるようにする。
第3時	○大きな台上前転（膝のはし前転）ができる。	②ステージの上でネックスタンドを行い、「はね」のタイミングや手の着き放しがわかり、できるようにする。
第4時	○台上ネットワークスプリングができるようにする。	③台上前転の着手位置を前方に移して台上ネットワークスプリングができるようにする。
第5時	・ネックスタンド型「はね」ができる。	④ステージの上でヘッドスタンドを行い、より大きな「はね」ができるようにする。
第6時	○台上ヘッドスプリングができるようにする。	⑤台上ヘッドスプリングができるようにする。
第7時	・ヘッドスタンド型「はね」ができる。	⑥ひねり横跳びこしの方法がわかり、できる。
第8時	○ひねり横跳びこしができる。	⑦目線、台上ハンドスプリングにチャレンジする。
第9時	○台上ハンドスプリングができる。	○みんなの頑張りが認め合えるような発表会の形式について話し合い、プログラムを作る。
第10時	○跳び箱発表会を計画し、それに向けて練習する。	

第11時	○発表会を運営する。 ○まよめの感想を書く。	○プログラムに沿った練習を行う。 ○発表会を自分達で運営し、グループ学習の成果やみんなの頑張りを評価する。
第12時		○学習のまよめの感想を書く。

3 授業の展開

(1) 本時の目標

○2次空間の大きなはね跳びができる（ヘッドスプリングまたはハンドスプリング）

○友達の技を分析し、みんなで教え合うことができる。

(2) 授業の展開例①（省略）

◎子ども達の日記より

○前は横（跳び箱が）のハンドスプリングで失敗して、今日のはたてのハンドスプリングをしました。まずはネックスプリングから始めました。ぼくは着地とあふりには気をつけています。Rちゃんはハンドスプリングがほとんどできていました。ぼくも負けていられません。今日わかったことは近くに手をついたら、あぶないけどあふりがかつこよく見せられると思ったけど、遠くに手をつい

てあふりを大きく、美しくきれいに成功させます。(C君)

○今日は久しぶりに跳び箱をやりました。全然やっていなかったのでできるか心配でした。ヘッドスプリングも全然できませんでした。あふりができませんでした。跳び箱の上でブリッジをするのと同じっていました。やってみたら少しよくなりました。1回だけうまくできてその後は少しずつよくなりました。明日もうまくできたいです。

○今日は紙にヘッドスプリングとハンドスプリングのポイントを書きました。グループで話し合っって書きました。その後に練習をしました。私はハンドスプリングをしようと思っっています。だけどヘッドスプリングになっってしまいます。それなのでちゃんと手をみているか、A君とE君が見てくれました。そしたらなんと1回だけハンドスプリングになりました。だけどその後からぜんぜんハンドスプリングになりませんでした。練習して発表会までにはできるようになりたいです。(Gさん)

○私はハンドスプリングをやりました。どうしても跳び箱に頭がつくので「そればいいんだな」と思いました。でもやってみるとそれなくて跳び箱の角に背中をぶつけたのですごく痛かったです。今度はと思っって跳んでみると、

Gさんに手のつく場所が悪い。」と言われたのでそれを直そうと思いました。(Fさん)

○ぼくは前までハンドスプリングの練習をしていました。でも今日は片手ロンドダートの練習をしました。C君と一緒にしました。でもぼくは宙返りがしたいので、ロンドアートじゃないので、先生とA君で「バック転かバク宙すれば？」と言われました。その時は気を失いそうになりました。その後はずっと宙返りの練習をしました。ぜんぜんできませんでした。まずは宙返りを成功させてから本番をむかえたいです。(E君)

4 まだまだ まとまらないんです

「目線ができてないよ」と注意したのに、直そうとする人がいなかった。

E君の体育ノートにはそう書いてあった。

「跳び箱を見続けること」これは台上ハンドスプリングをするために重要なポイントとなる。首が起きることによって逆さ感覚のバランスがとれるのである。しかしそのことをみんなで指摘仕合ながらなかなかできない。実は跳び箱を見つづけるということは簡単なことではないということがわかった。

「何かいい方法はないか。」

「先生、跳び箱にカードを貼って、なんて書いてあるか読むようにすれば？」

「おお、それはいい考えだ。『私はチョコレートパフェが好きです』とか。」

「それは長すぎますよ。」

ということで一文字か二文字のカードを貼ることにした。これまで

台上前転↓ネックスプリング跳び↓ヘッドスプリング跳

び↓ハンドスプリング跳び

という順序で「跳ね跳び」に取り組んできたが、台上ハンドスプリングに至るまでに2つの壁があると感じた。

第1の壁は、台上前転からネックスプリング跳びに移行する際に、いわゆるロール系からスプリング系になる。ネコちゃん体操でいうところの「はく」と「ふる」の違いである。これはステージ等を利用した「ネックススタンド」「ヘッドスタンド」からのね動作の練習で割とスムーズに移行できるので小さな壁である。そして第2の壁は「ヘッドスプリング」から「ハンドスプリング」に移行する際の「視線」「首の角度」である。これをクリアすることによって

ハンドスプリングへの道が開ける。

じつはまだ発表会が終わっていないのでこのレポートはまとまらない。発表会では4〜6年生は「ヘッドスプリング」か「ハンドスプリング」。そしてもう1種目を発表する予定である。普段は4〜6年の合同体育であるが、跳び箱については途中から低学年も含めて全校体育という形で行っている。

高学年が教える場面が設定されるだけではなく、高学年の技をみるだけでも低学年は上達する。あらためて子供達は異質共同の集団の中で育っていくのだと感じている。

●VTRを見ながらの報告であったが、そのレベルの高さに驚くばかりである。そこまで到達させるには、全校で統一した指導系統と1年生からの学習の積み重ねがあったからである。跳び箱学習での課題は、恐怖感があげられる。それは学年を追うごとに強まっていく。従って1年生、もしくは幼児教育時から跳び箱遊びや逆さ感覚、肩支持感覚を認識させ、恐怖感ではなく「楽しさ」を感じさせることが大切であろう。協議の中では、一つの動作だけでなく、二つの動作にして一つの動作にして教えるていくと効果的である事。身体操作で、何を意識させるかという点、視線ではないかという点、視点を焦点化さ

せるために、台に書く・貼るなどをして目線を意識させると良いのではないか。また、認識させるために、チェック項目を教師ではなく子供たちに考えさせる等の工夫があっても良いのではないかという意見もでた。器械運動は克服種目と言われ嫌われる傾向にあるが、本校の子供たちは体格に関わらず器械運動が大好きで積極的に取り組んでいる成果が現れている実践であった。

体育科年間カリキュラム

猿払村 浜鬼志別小学校 三野宮公恵

○詳細は省略

新指導要領に応じて六学年分を作成した。

配慮事項として

- ・ 体育的行事(運動会・陸上大会)を考慮して題材を入れた。
- ・ 地域・季節などの実態に即した種目(水泳、スキー)を入れた。

- ・ 集合・整列などの基本的なルールは継続的に指導する。

● 一人で作成することにより、単元の系統が生かされ、地域・学校の特色も配慮されている。単元(運動文化)の特質や基礎的な技術も研究されている。さらに、内容が

わからない先生向けに細案が出されるとより良いであろうが、一度にはできないので、その都度に出していく手もある。そうすることにより、より系統や、つけさせた力がうちだされ職員研修にも繋がる。それは、子供たちの力にも繋がるということであろう。

障害児体育

中標津町立中標津東小学校 中島 義夫

はじめに

本校の特別支援学級(はるにれ学級)所属は22人/610人で、主に交流学級で生活する子を除き、9~11人で朝の運動を行っている。本来なら養護学校が適切な子も含まれているので、個人差が大きな集団となっている。今までは、いわゆるサーキットトレーニング的な運動をおこなっていた。約20分程度の時間を多い子で9周、病虚弱の子も2周程度(体育館)走ったりしている。

内容は、マットのトンネルくぐり、前転、ハードルまたぎ、セーフティマット、階段からギャラリ、降りてポールを壁ぶつけ、大きめな平均台、ミニトランポリン、ケンパ、短なわ。といったもので一周分である。

？・？・？

- ・ いろいろな運動要素を取り入れて、一見楽しそうに見えるが、そこで学ぶものは何だろうか？（運動文化を学び享受するという点で）
- ・ 場が設定されて、数多く回るといえるのは、かつての行間体育（サーキットトレーニング）と変わりないのではないか。
- ・ 集団としての運動場面がなく、個々人による克服運動である。
- ・ 子どもが「わかる」という視点がなく、からだづくりや訓練的な内容が設定されている
- ・ 運動を発達刺激に限定し、文化として捉えていないことと、集団教育の視点が薄い。

現状としては様々な障害種別を区別・判断し、それぞれ個別的に支援、訓練プログラムを作り出していつている。個別指導計画が細かく作られ（それも必要ではあるが）援助を多く要する子ほど他と切り離されて個別的に特別的に扱われる仕方が多く見られる傾向にあるし、肯定されている。また、自閉症児は、確かに人との関係を結ぶのは苦手であるが、人とその活動に興味関心がないわけではない。それゆえ自閉症の子どもも、仲間の集団とその活動が見える

場で活動できるようにすべきである。障害児の教育も一般の教育と同じように、一人一人の子どもが集団の中でぶつかり合い、時には共同しながら運動文化を享受し能力を身につけ個性を磨いていくのではないか。大宮（神戸大付属特別支援校）は近年の環境による分類は「学校や家庭が自閉の子をさらに自閉にしている」とさえ言い切っている。

障害児教育の考え方と課題

- ① 全ての子どもは発達の可能性を持っている。
- ② 障害児教育はけつして特殊なものではない。
- ③ 子どもは発達要求を基礎に子どもの発達段階に即して教育が行われるべきである。
- ④ 子どもは集団の中でこそ真に発達する。

（1973 体育研究同志会）

第1回障害児体育分科会より）

また、障害児体育のねらいとしてあげられていることは、

ともにもうまくなる（身体）
 ともに楽しみ競い合う。（自分の表現と集団）
 ともに意味を問い直す。（教材の価値）

基礎的運動能力として

- ・姿勢操作の能力
- ・スピードコントロールの能力
- ・物や人の動きに対する、予測判断する能力

詳しくは略

扱いたい教材として (別紙参照 省略)

では、どうしていくべきか？

特別支援校や養護学校は別として、一般の特別支援学級では体育を取り出して行うことはまずない。普通学級の中に入り(交流学級)そこで学んでいくことになる。しかし、本校のように生活単元学習とからめ、朝に運動を取り入れている学校もある。そこでの運動の時間を障害児体育の場ととらえ、中身を吟味していくことは必要となってくる。

ここでは、教材を切り刻むことなく、運動文化としてまわることを与えること。目の前の子ども達の発達を引き出すものは何か？価値を問うようにしたいものである。そして、集団でやるから楽しくなるようなものを選びたいと考える。そこで、本校で取り入れたのは「長縄」である。1年生

や病弱の子は表現跳びを中心に。3年生以上は連続跳び等に挑戦できるし全体での表現跳びもできる。

長縄が作る「共感・共有世界」は、ただ跳ぶというだけでなく思った以上に豊かで、魅力的である。

縄という「跳ぶ」と言うこと、だけがイメージされるが、シンプルで子ども達に何をするかを伝えやすい。振る・回す・引くに始まり、踏む・つながる・くぐるなど多彩な動きが作り出せ、そうした身体操作を引き出す材料としても優れている。

子どもによつては、エネルギーギッシュに動きたい時期であり、そのエネルギーやパワーを発揮し、動いた後の爽快感を味わいつつ達成感を積み上げていくことも大切であろう。

さらに集団の動きの流れを感じて動いたり、友達の動きに憧れをもって、自分の動きに取り入れたり、見られることを期待して動いたりなどは集団的に作り出していく課題と言えるであろう。

●多くの学校でも障害児体育としては、体力づくりをメインに行っている現状である。または、好きな運動しかないという例もあった。障害児体育でも個人で克服したり個別指導だけでは学べない。障害児体育でこそ、集団で学ぶということが大切であり、指導者と子供たちのズ

レをできるだけ少なくしていくことが求められる。運動を単なる発達刺激と限定するのではなく、運動文化として捉えていくことが重要なのではないだろうか。

三二 まとめにかえて

今年の体育分科会では4本のレポートが出された。その中で感じたことは、全校共通理解による系統的指導の必要性である。米谷氏の跳び箱実践もそこができていくから結実している。その事は以前から何度とも言われ続けていることだが、なかなか現場では難しいこともある。特に大規模校での困難さは中島も感じている。そこを逆手にとり、教育課程編成に着手した三野宮氏実践の今後楽しみである。教員を目指す大学生、しかも体育が苦手である学生優先で体育科教育を行っている大瀬氏は、地道に小学校教材を取り入れて「何故？」を繰り返し認識に迫っている。指導要領が変わっても、何が大事で何を学ぶかは、変わっていない。子ども達は一人で学ぶのではなく、集団で学び人格を形成していく。それはいつの時代も変わらないものだろう。今年度の分科会は参加者が昨年と変わらなかったことが少し残念である。体育科で学ぶ事は他の教科にも十分派生していく。共に学ぶ人を一人でも増やしていくこと

も我々の大きな課題である。

(中標津東小学校)